

反戦青年委員会の頃

望月彰(当時・東京地区反戦青年委員会世話人)

吉川駿(当時・第二次ブント東京都委員会)

— 今日では、一九六〇年代にマル戦(マルクス主義戦線)派そして第二次ブントの政治局員、労対部員として、労組や反戦青年委員会の指導に携わってこられたお二方にお話を伺いたいと思います。最近、国立国会図書館でマル戦派の『黎明』や第二次ブント初期の『戦旗』を読み直してみて気づいたんですけれど、ともかく労働運動関連の文章が多い。労働運動方針が常に紙面の三分の二から四分の三を占めています。学生運動は概して小さな扱いで非常に冷遇されていた。

労働者の党めざして

望月 労働者階級の党という、当時の建前が災いした。「学生党」だなんて言われたくない(笑)。実態は学生党なんだけど。それに対するインフェリオリティ・コンプレックス。

吉川 でも関西の前田(裕晴)さんのところは別としてね、東京のブントの中で、労働者に多少とも根を持っていたのはマル戦派だけだったと言っているいかもしれない。

望月 しかし全体の影響力という点ではゼロに等しかったよ。

吉川 そりゃ、まあそうだろうけど。

— 吉川(土方肇)さんは静岡大学の第一次ブントでしたね。

吉川 入学したのが一九五九年だったから、まさに安保闘争の初めという時期に学生生活を送ったわけだ。地方だったから、東京のようにドラスティックではなく、入学したときはまた日本共産党静大細胞が分化していく過程だった。一九五九年は東京からの中央指令でストとか授業放棄の連続だったけど、上京して闘争に加わったはじめは六〇年一・一六の岸訪米阻止羽田闘争。地方から動員された部隊は早く着いて空港に入れたんだけど、そのあと空港周辺の検問が始まったから、かえって東京の連中があまり入れなかった。唐牛(健太郎)全学連委員長以下五〇〇人ほどが食堂に籠城し、早朝に排除された。そのあと、安保闘争の総括をめぐる分派ができ、ブントが崩壊していく過程で、全学連の二七中委とか一七回大会とかにも、自らの立場をはっきりさせずに出たけど、親組織のブントは誰もいなくなり、ろくでもない総括でマル学同一革共同全国委員会(中核派・革マル派分裂の前)にヘゲモニーが握られていくのに反撥し、社会学のままで行こうと決意した。この頃もちろん黒田寛一の本をよく読んでいくのに反撥し、社会学のままで行こうとした毎日だったことを思い出すね。安保闘争の後、静大ブントの十数名が革共同全国委員会に移行し、半数以上は戦列そのものから離れていった。私は自治会の副委員長をやっていたという

こともあつて、自ら運動を創出して行かねばならず、日共でもなく革共同でもない自分の道を開かねばならなかった。そこで社会学同の名で第三極を作っていく。この頃影響を受けたのは長崎浩さんが『現代思想』に月岡晋一の名で載せた『歴史の論理化か、論理の歴史化か』という論文で、黒寛についてはこれ一つでだいぶ整理がついた思いだったね。ただし社会学同とはいっても、東京とも関西とも付き合いはあつたけど、いわば「静大独立社会学同」。静岡大学には五年間いて、卒業後に就職もした。共産主義という「主義」は、生き方の問題だ、学生身分のままでは観念としてのマルクス主義は分かつて、革命の主体たる労働者というものを実感できないと思つてね。その年の三月、服部（信司）水沢史郎／第二次ブント書記長）君を中心に岩田弘さんの理論をか ついでマル戦派がスタートして、ここに合流した。卒業後、労働者になつたわけだけど、一年後にはそれも止めて、当時の言い方で言えば党派の「職革」になつた。職業革命家（笑）、シヨツカクとして、マル戦派の労対を担うことになつたんだ。労働者に根を持たない共産主義者の組織なんてのは駄目だという気持ちでプラグマティックに持つていたわけだね。どうやって労働者組織を作っていくのかということ、望月（秋本道夫）君といろいろ考えた。彼と一緒に、猛烈にやつたのがピラまきだよ。

望月 うん。

吉川 工場の前とか。はじめは我々も力学主義的に考えてるから、どうしても三公社が主だった。要するに国鉄と全通と全電通の、主要かつ左翼がいると見られるところを軒並み。

——共産主義者同盟の署名ピラですか。

望月 それはそうです。

吉川 あれは凄いエネルギーだったね。勤めてる党员も、朝六時半くらいからピラをまいて、それから勤めに出る、そういう事もあつた。国労にもまいたし、革マル派のど真ん中田端に行つてまいたり、田町にまいたり、品川でまいたり。それから三菱自動車の川崎とか、とにかく闘争があるというところに片端から出掛けて、左派的戦術を提起した。人勧（人事院勧告）の「完全実施」を労働組合の右派が言つてると、こちらは「人勧打破」を打ち出すとか。その是非については後で議論したいところだけどね。そういう中から「点」の存在が結構広がつてきたのかな。自治労や教組、全通、だつたら麻布、芝、晴海、中野の一部とか。民間ではTR、FK、TKとか。それで第二次ブントを作つたとき、労対のキャップは山崎衛（赤崎次郎）氏なわけ。で、東京の労対部長が望月君、渥美（佐々木和雄）君、浦野（松村三郎）君、右田（さらぎ徳二）氏、それに俺。山崎衛つて人はご存知のとおり元日共港地区委員長で第一次ブントで、千代田丸闘争では輝かしい戦績を残していた。ある意味では良ちゃん（高橋良彦）松本礼二、故人／第二次ブント六回大会議長）と共に労働運動の神様の存在だった。

——関西にもマル戦の労働者組織がありましたでしょ。

吉川 静大社会学同の先輩にKつて人がいまして、彼がM社に入りKM労連というのを組織して、近畿一帯から名古屋から静岡に至るまでを全部括りあげた。なかなか優れた組織者でした。書記にわが組織のメンバーを入れて、あとは尼崎自治労とか教組の連中とか。できはじめはやっぱり学生運動あがりの連中が入つてということだろうね。

——東海、名古屋の労働者は。

吉川 東海、名古屋はね、まず名大と愛大に仲間がいた。マル戦派になる前、我々は欲張りに「東海社学同」つてのを作ろうかと思つてさ（笑）、実は望月君が六〇年に上京した後の浜松（静大工学部）も結構な部隊になつてた。その余勢を駆つて革マル拠点、愛大豊橋に乗り込んで、豊橋から名古屋、名大から岐阜大まで行つて……。

——静大独立社学同時代の話ですね。

吉川 そう、これは東京も関西も確たる方針があるとは見えなかつたからだよ。だから敢えて「静大独立社学同」を名乗つて、もっぱら大衆運動に力を注いでいた。当初、全くの少数派だった我々も徐々に力を持つてきて、日共、革共同を凌駕する勢力になった。そこで静岡の運動は柿沼、F、成島（忠夫）君たちに任せて、私自身は、よく外へオルグに出掛けた。六〇年代前半の静大は、決戦論みたいなことさらに煽り立てなくても、大衆運動が成立してしまう場所でも、活動家の人数でいえば、日共がいて、革共同がいて、当初は僕らが一番少なかつたんだけど、どういうわけか一番人気があつた。学生大会でも、僕らがたいてい一番激しい方針を出すんだけど、それが通つてしまふところもあつたね。もしかしたら、上部組織のない独立社学同であるということが大衆的人気の原因だったのかもしれない。日韓闘争も、初めから最も大衆的な盛り上がりを見せたのは静大だったんじゃないかな。そして、もう一つは静岡の労働者を含めた青年共闘に顔を出して、青年共闘の中で社学同の存在も定着してきた。その頃に名古屋で日福大や名大の出身者が名古屋の労働者に足を持ちはじめたと思うね。同時に豊田市政研とか……。

——渡久地（政志）さんの……。

吉川 そう、俺はあのへんまで出歩いてた。それで柿沼君が何かやろうつていうような感じになつて、それで名古屋と東海の労働者部隊ができていった。関西ブントの労働運動部隊は、もちろん前田（裕瑛）さんの優れた成果なんだけど、関西から外へ出てオルグを展開しようつていう発想があまりなかつたんだよね。統一委員会ができてから、やっぱり関西ブントとして出なかつたという風になつて、渥美君だの浦野君だのが東京に来たけどね。で、東京からマル戦派の望月君とML派の河北（三男、故人）君が一所懸命オルグに来ていた。そんなわけで、名古屋の方は静大卒業後の柿沼君中心に動いていったという形だよな。

——六三年から六四年の話ですね。

吉川 僕らが結局マル戦派を選んだのは、宇野経済学批判が的を射ているように感じたからですね。例の、恐慌の必然性、戦争の必然性と、あと革命の問題……。これを、宇野さんの原理論と帝国主義論と現状分析という三段階論の批判へと繋げながら検討していった。岩田さんの場合、宇野理論ではなぜロシアで革命が起こつたのかを説明できないかという問題意識を持っていたわけだ。なぜイギリスやドイツではなかつたのか。それで岩田さんは「世界資本主義」という概念とともに、その「弱い環」という視点を提出した。つまりロシアは世界資本主義の弱い環であつたからだ。これが宇野理論（原理論・段階論・現状分析）批判につながるわけです。この世界資本主義論に僕らもころりと参つてしまった（笑）。完全に納得したわけじゃないけど、当時の僕らには反論できなかった。

——七回大会のときブント全体の黨員数が三三〇人ぐらいで、反マル戦各派合わせて一八〇名、マル戦系が一五〇名くらいだったと思います。その一五〇が殆ど離脱してしまったことで、七回大会を境に東京のブント系労働運動は体質が変わるじゃないですか。それまでは、全通、全電通、自治労、国労、教労、要するに三公社なり何なり、あるいは民間にしても大きな単産のなかの青年部とか青婦部に小なりとはいえ足場を持つてるというスタイルで、だから『戦旗』に出てくる論文にしても、日教組の、あるいは全通の今度の方針に対して批判するとかという形式になる。七回大会の後はマル戦系の労働者黨員がいなくなっちゃったから、藤本昌昭（旭凡太郎）さんや田宮高磨さんとか上京組が関西から落下傘で降りてきて強引に地区党を作っていくわけで、中小や零細企業の労働者個人々人をかきあつめて百パーセント地区反戦主体の運動になる。

吉川 望月君は中央区反戦青年委員会をやつてたわけだが、田宮君はその後の中央反戦で、佃島に入った。

望月 それ、当時は知らないんだ。ずっと後、すべてが決着がついちゃった後から聞かされた。あの段階では関西派は俺たちと何のコンタクトもないんだもの。

吉川 労働運動としてはな。

望月 労働運動としても政治的にもないんだよ、七回大会の前から。

吉川 後になつて分裂するとき、俺ははつきり言つて、渥美、浦野と望月を一緒にやらせようと、物凄く思つてたわけね。学生運動は、マル戦系だの関西系だのなんていう、戦術の違いのレヴェ

ルで組織していくようなスタイルだったけれども、労働運動に対しては一体になつてやつていかなくちやと。

望月 それはそうだ。でも日韓闘争後は俺、労働組合の問題だとか、職場をどうするかつて話には全然タッチしてない。

反戦青年委員会のたたかい

——むしろ反戦青年委員会。

望月 反戦青年委員会つていう一種の統一戦線の政治折衝係。社会党は次にどういうデモを打つだろうか、そうしたらこっちはどうしたらいいだろう。中核派はどう出るか、革マル派はどう出るかと。そのことばっかりなんだよ。

——若い読者のために反戦青年委員会のできた経緯とかを話していただけますか。

吉川 はじめは社会党、総評の方針なんだ。だから全国反戦青年委員会には、かの高見（圭司）君が、社青同の全国本部として出てくるという形だったわけ。新左翼諸派はこれに乗ろうということになったわけだね。それで職場反戦というのと地区反戦というのが並立してきていくという形になった。職場反戦つていうのは総評でまとめるけれども、地区反戦となるとどこかの党派が主流になった。そういう組織だから、はじめから党派反戦にするのではなくて、日共以外の全体を網羅するべきものとして地区反戦もスタートしたと。

望月 実態は新左翼諸党派と社会党の党派会議なんだよ。全国反戦はそれとは別で、まあ総評青年部みたいなもんさ。最初は社青同の、どっちかっていえば反解放派系、ということは協会派のことなのかな。僕もよく分からなかったけどさ。それが全国反戦の代表を務めてヘゲモニーを持つていく、それでいいじゃないかということだ。スタートしたわけだよ。地区反戦の実態はそれとは別で、各党派がそれぞれの地区反戦を代表して来るような形を作ったんだよ。ブントは例えば中央区反戦青年委員会という形を取った。後から中核と悶着になるんだけど。

——で、吉川さんが板橋。

吉川 板橋反戦。板橋あたりでは、職場を三つか四つ持つてりゃ主流になるわけだ。他が大したことないから。その後王子野戦病院開設阻止闘争があるから、北部全体の反戦連合ができるわけね。そうすると「板橋はもうブント、それでよし」と、他はみんなそれを認めるわけだ。そうすると豊島は全通があるから中核派と。文京は本郷郵便局を中心にして社青同解放派だった。北区は動労田端を中心にして革マル派。この四つが仲良く会議やるんだから（笑）。ここで野戦病院闘争の企画が練り上げられていった。

望月 地区反戦には新左翼労働者が独自のデモ隊を作れるという意味があった。

——当時の労働者の街頭闘争というところと東京反戦がいつも戦闘的な方針を出して突き上げるわけですよね。すると全国反戦が反対して現場でいつも揉める。その全国反戦の実態は、社会党の……。

吉川 どちらかっていうと、やはり協会派系統というかね、岩垂（寿喜男）さんが青対だったよ

うな気がする。それで東京地区反戦のキャップが樋口君ですよ、社青同解放派の。全国反戦は協会派系統プラス総評という構造で、東京反戦があつて、その下に地区反戦という構造だった。

——各区の反戦と同時に北部反戦のような地区連合もある。確か南部反戦というのもあつた。吉川 うん。でも、あそこは実は殆どなかったと思う。港反戦は中核派だったんだけど、他にはあまり反戦ができてなかったから、そういう点と点を繋いで南部を名乗つてしまえばいいっていう感じですよ。

望月 品川は品川反戦があつたよ。

吉川 あつたね、全通大崎とか。

望月 反戦には、職場に影響力を持つグループがデモのときにどつと出てくるっていう反戦と、活動家個々人が集まっていうところがあつたね。どちらかと言うと個人的に出てくるころが多かった。全通大崎つていえば後の前衛派の大拠点なんだけど、反戦青年委員会が盛んな頃は彼らは解放派系ノンセクトなんだ。

編集部（北健一）ところで、素朴な質問なんですけど、新左翼系労働運動は既成左翼の労働運動に対してどういう違いや対立点があつたんでしょうか。

吉川 俺は、やっぱり戦術的なものしかなかったのかなつて気がするんだけど、どんなもんなんだろう。

望月 それさえもね、別にあつたわけではないかもしれない。人間の好き嫌いじゃないかと俺は思うよ、職場の中のね。最近、戦後五〇年の特集をNHKがやったときに、動労の闘いを扱っ

たことがあるんだよ。国労夕張の例の四・八ストに対して、断固として最後まで闘争を貫いていくという人たちが革マル派の中にもいたと思われる。まあ、こういう言い方は語弊があるかもしれないけど。動労のなかでも、最後までスト権ストを貫くんだというグループと、止そうやというグループと、いたわけだ。その分裂の様相っていうのは、もうどこでも経験した第一組合と第二組合の分裂と同じなんだよ。長崎造船船社研の第三組合論も早くから我々は知っていたけど、はつきりしなかったね。結局、すつきりと戦闘的に分岐する、ロゾフスキーの例の左翼労働組合主義で行くという考え方と、そうではなく企業内組合が全体として変わる方向で行かねばっていう考え方と両方あってさ。建前としては、マル戦派は左翼労働組合主義は駄目だということになっていた。

——戦闘的分裂組合では駄目だと。

望月 建前はそうであっても、反戦青年委員会で例えば一つの職場が、全連の集配なら集配の職場がどつとデモに行くとなつた場合、これはもう、行かない連中に対して頭来ちゃうわなあ。長船社研だつて同じ気分だつたと思うけどね。あんな奴らと付き合えないとなればさ、もう俺らは俺らだけで行くんだという気分にならざるをえない要素っていうのはいつもあるから。だけどそうやっちゃうと、もうそれでお終いということになってしまう。

吉川 労働者たちが日共や社会党と区別して労働運動をしていくつてときに、その時点では関西派だのマル戦派だの中核派だの革マル派だのというような際立った違いってのは言えなかつたんじゃないか。社会党と共産党と第三極という、そういう組織の仕方であつて、それをどこが先に手がけるかだけだ。スターリン主義か反スターリン主義かなんて言葉だつて、そんなに労働者に入つていける言葉ではなかつたんじゃないかな。

望月 党派活動というのは、純粹に綱領なり理論それ自体で組織したよ。「お前、マル戦派の党员になれ」という場合にはさ。だけどそれは、明日何するかつていう世界とは全く乖離しているわけだよ。

「生活と権利の実力防衛」掲げて

——例の「生活と権利の実力防衛」路線なんかは、あくまでも労働運動現場の線で構想されたように思えるんですが。

吉川 まあ、そうでしょうね。その地点からしかやつぱり労働者の盛り上がりはできていかないという、そういう……。

——運動感覚ですよね。

望月 そうか、俺は違う……。

吉川 いやいや、あれは望月君の感覚を岩田さんが取つたんだと、俺はそう思うよ。俺なんか逆になさ、ああいうスローガンはあまり好きじゃなかつたんだ（笑）。

——あれは要するに、社会党、共産党も職場で建前はなかなか良いことも言うけど実際には日和るわけで、労組幹部に対して言つた通りのことを逆手に取つて実際にやれと言つて突き上げ

るためのスローガンですが、私なんかは、やっぱりマル戦系の方が現実感覚を持つてるなと思いますでしたね。だつて当時、ブント関西地方委が梅田の駅前で「賃金奴隷制を廃止せよ」っていうビラをまいたことがあったでしょ（笑）。大衆との最初の接点で最大限綱領を振りかざしてどうするんだ、ちよつと運動の感覚が違ふんじゃないかと思った。

吉川 俺らだつて労働者に言われてきましたからね。職革たる我々がさ、この方針で行ったらどうだつて言つても、そんなの浮いちゃつて駄目と言われる。俺、それは大事にしなくちゃならんと思つて任した。責任持つていよいよ引つ張り始めた中枢メンバーが一つの職場の中の力関係を判断しながらやる場合には、任しとかと駄目だったわけだよ。あと組合を掌握してしまつた後の問題がある。

望月 あの、社民ダラ幹がいて、新左翼の反戦が突き上げるといふ構造がさ、ブント系の組合のなかにも生まれる。

——すると委員長はダラ幹にやつてもらうのが一番安心と（笑）。

望月 だけど、ダラ幹と呼ばれる人たちが本当にダラ幹なのか。確かに本当のダラ幹もいるよ。奴らは悪いよ、本当に。だけどそうじゃなくて、組合委員長やつてる人だつて大勢いるわけだよ。身近な敵にばかり目が向いちゃうんじや本当の喧嘩もできない。企業のなかには、もうどうにも我慢がならない問題だつて現にあるわけだよ。絶対あるわけだ。だけどそれを全部取り上げていたつて始まらない。どこでけじめつけて喧嘩するか、どのテーマの何でやりあうのか、これが難しい。それがないと、ただの不満分子で終わつてしまふわけだ。それでもさ、発言権が持てる

か持てないかつていう話は残るからね。ダラ幹だからつてすつぱりと切つてしまふ話つていうのは残らないと思う。何も残らない。マル戦派が分裂してから後の話だけどね、前衛派が工場占拠を提起した。あれは自主管理社会主義、企業乗っ取り闘争論なんだよ。企業乗っ取り闘争やれば会社は潰れるわな。潰れても、それをある種生協的なものにして今日まで来てる場合もあるわけだよ。戦後の革命期の後の日本共産党もそうやつたに違いなくて、レッド・パージで食いつばぐれて最終的にそういうことになつたというのもあつただろう。そのミニチュア版はマル戦にもブントにもあるんだよ。

吉川 この人はもう「党なんていうのは……」つて立場だから（笑）。俺はそこまで言う気はないけどさ。ともかく、本当に労働者レヴェルで言つたら、社会党か日共かも一つかつてくらの選択肢だつたら見えるけど、それ以上の選択肢を理論で分けていくつてレヴェルになるとなかなか難しかったでしょうね。また、それをまとめていく度量というか、統一戦線を作りだしていく姿勢が当時はやはり欠けていた。ただブントにはなぜか、革共同や解放派と違って、仲間だつていうところがどこかに残つてて党派闘争に手心を加えてた。だから七回大会以降、内ゲバの犠牲が少なかつたという気はしますね。

七回大会―分裂への伏線

望月 同感！ それは同感なんだけど、マル戦派にも問題があつたんだよ。重大な問題があつた。

『理論戦線』という雑誌の四八号(特集「第二次プロト三〇年」)を読んで俺は二つのことが分かったね。第一に、七〇年安保闘争というのは六七七年の二つの羽田闘争なしにはありえなかったわけだが、マル戦の名誉のために言えば、マル戦はそれを先頭でやったんだよ。第二に、マル戦派以外のプロト諸党派はプロトの大合同について、大枠で「マル戦派も入れてやる」という心理状態だったんだ。マル戦系は違うんだから。俺たちは「党中党」だ、エラいんだと思ってる。全部方針出して、全体を動かさちまえと。他の連中はたまになかったと思うんだよ、確かに。

吉川 その通り。服部君の流儀だね。ただ関西プロトは地域的にも力を持って根を張っていたけど、マル戦派以外の東京のプロトは、学生的というかインテリのというか、組織としての力をあまり持っていなかったから、ああいう事態を許してしまったということもある。

望月 やっぱ関西の連中もさ、必死だったと思うよ。七回大会のずつと前からの綱領論争だけれど、綱領論争じゃ、当時これはどうしようもないよな。政治局会議で、こう言っちゃ失礼だけれども、論争にならないわけだよ。そのあげくに、今度はマル戦がいる限り俺たちは革命家として生きていけないって心理が生まれてしまったんだ。党なるものの宿命だったんだよ。誰が仕切るか、誰が指導者になりますかという……。政治過程論以来の理論的背景もあるよ。あるんだけど、それがもし科学的理論ならば理詰めを持っていける、証明できるってことになるけど、そうじゃないんだから。そうすると、お前がいちゃ俺たちは生きられないという心理状態になってしまう。

——ちよつと補足で説明入れますとね、第二次プロトの政治局会議というのは、例えば明大闘

争のときにそれを議題にしないわけですよ。

望月 すると割れるからだよ。

——政治局会議では具体的な議論をできずに、ひたすら綱領論争をやってるわけですよ。

望月 俺は、関西から上京してきた人たちが、何で根回しなしに会議やるのかなって、かなり早い段階から思った、正直言つて。

吉川 フラクは止めようということ、マル戦系としてもプロトの統一後はフラクを開かないことを申し合わせた。それが途中から段々崩れてきた。

望月 そのへんのこと、服部君にも聞いてみないと本当のことはわからない。『理論戦線』四八号の記事では服部君は前田さんを訪ねて関西まで行ってるわけだよ。

吉川 前田さんは落ち着いた労働者の感覚から問題を見ていたから、よもや分裂には進展すまいと思っただけだね。

望月 やっぱ指導者の意識の問題だと思うよ。お互い前田さんのようなスタンスでやってればあんなことにはならなかった。

——七回大会まで、割れるかも知れないという話は下りて来ませんでしたね。

望月 言わなかったもん。これはマル戦系政治局の日和見主義なんだ。どういう意味で日和見主義かって言ったらね、割れたらお終いだってことは分かっているわけだよ。割れるって言っちゃいけないの、マル戦系の黨員に。割れるって言うこと自体が、マル戦それ自体の否定に繋がるんだよ。だから日和ってるわけだよ。

——六八年の二月頃でしたか、東大に行く川上（浩、故人）さんの鼻柱が曲がっている。どうしたのって聞くと、「ああ、ガラスの灰皿ぶつけられた」とか言ってるわけ。会議で成忠（成島忠夫）さんが殴られたとか聞き、顔にアザ作っているのも多いし、どうも学生の方はエライことになってるらしい、高校生のこちらでも覚悟を決めなければならぬのかなって思うんだよ。どうなりますかって吉川さんとかに聞くと、いや多分どうってことないよと（一同爆笑）。

望月 俺は前衛派に参加したけど、もういかにして身を引くか考えてなかった。そういう点で坂内（仁、故人）なんか俺に頭にきていたと思うよ。前衛派というのは実際には、坂内らの若手三人組がいて、成島道官がいて、これがすべてだった。彼らが法政と明学の部隊でもって、何やってたかっていえばプロ軍（武装蜂起準備委員会）や中核派と毎日飯田橋戦争。その果てに石田さんから独立しちゃったんだ。俺は本当に傍観者の立場だったけど、彼らは大した連中だったよ。坂内は剣道やってたんだ。強かった。

編集部（北） 何をめぐる対立だったんですか。

——確か法政のバリ・スト解除の過程に自治会争奪の問題が絡んだということだったと思います。法政にはマル戦系のブントはいなかったと思いますけど、社会学は半分くらいがノンセクト化してレーニン主義研究会（L研）になり、他が前衛派に行っちゃったわけです。その前衛派の連中が、最初はプロ軍と喧嘩になったんじゃないですかね。それで七〇年の五月頃、連日飯田橋の土手でプロ軍と鉄パイプ同士の内ゲバ。相当悲惨だったんですけど何しろ警察病院がすぐ脇にありますから重傷者はすぐ運び込まれて全員助かった。それがどこかで対中核派にまで拡大

しちゃったと。その少し前に、明治公園で前衛派と怒濤派の内ゲバがあって、清井（礼司）さんと並んで見てたら吉川さんが先頭で竹竿をふるってましたけど（一同爆笑）。それで七〇年の六・一四、代々木公園でやった大集会のときに中核・怒濤・プロ軍連合対前衛という、そういう内ゲバになった。中核派だけで五〇〇〇人近いですから五〇〇〇強対八〇の内ゲバ（笑）。ああいう時はかえって怪我人なんて出ませんね、一方的過ぎて。そうした過程で恐らく前衛派の実戦部隊の先頭に立ってたのが坂内さんですね。マル戦派は三つ、細かく言えば四つか五つに分かれたわけで、まず六八年五月頃、浜下（武志）さん、静間（順二）さんが立正の教養部の社会学あたりを足場にブントに戻る。次いで六月末に川上、松井（透）、中島（滋）、清井らが東大、早大などを足場にレーニン主義者協議会（L協）を作る。東京の高校生細胞と社会学同高校生委員会はキャップの高橋（博文）以下全員がL協に行きましたが私もその一員です。八月に、服部さん、望月さん、矢沢（国光）さん、学対部長だった成島道官さん、それから大田区の吉野（通芳）さんとか、あと岩田弘さんも入って、そういう人たちが前衛派というのを作り、医者になる勉強のためにということと一年くらい活動から身を引いていた坂内さんとか、立正大細胞のキャップで後に良ちゃんとか全労活をやる松井（靖好）さんなんか、しばらくしてからここへ入る。それに対して、政治局で吉川さん、山崎衛さん、学対で山崎順一さん、成島忠夫さん、石田（寿一）さん、学対で西陰（勳）さん、それから関東学院大とか静大とかの人たちが九月に労共委（怒濤派）を作って、ここは七〇年代にはいわゆる蜂起戦争派の潮流に合流していったわけです。柿沼さんから愛知の人たちはどこにも属さずいわば「独立マ

ル戦」化した。

望月 マル戦はそういう党だったんだよ。分裂の姿が非常に鮮明だよ。政治局と地区党と大学細胞、組織のヒエラルキー通りに分裂しちゃった。そうでしょ。

レーニンとの距離感

吉川 恨みを買ったのは我々か(笑)。

望月 L協は、吉川たちに文句あったわけだよ。もちろん僕にもだよ。

吉川 どちらかかっていうと岩田理論離れを焚きつけられたんだよ、L協からは。

望月 ヒエラルキー通りに分裂して、最後は個に分解してね、非常にすつきりしたじゃないか。で、今や個の時代が来たわけだ。もう日本全体としてそうですよ。今のHIV訴訟、あれ見るとね、本当に個の時代が来たと思うよ。見事なものだよ、彼らは。川田君たちのグループってのは厚生省前に座り込んだり、ときにはデモやったり、厚生省を更生しようなんてね。学生運動のもりでやってないでしょ。自分がそう思うから行くんだって言って、みんなやってるわけでしょ。今の市民運動のスタイルって、どこもそうでしょ。巻町とか福井県でもって反原発やってる市民運動もそういうスタイルだよ。

吉川 現代に来たな、オイ。凄い勢いで(笑)。

望月 で、ブントだつてさ、そもそもはね、六〇年でもってハイさようならつてすつきりし

ちゃった連中もいた。第二次ブントでも黒岩(卓夫)川達郎)さんなんかそうだよ。他の連中がどうだって俺は俺で行くんだつてね。石井(暎晤)正木昌人)さんがブントには党員の数だけのブント史があるつて言ったらしいけど、それでいいんだよ。ブントつてのはまことにおかしなものだ、頭はマルクス・レーニン主義なんだけど、行動はアナキズムだった。

吉川 これはまた強烈な(笑)。L協は組織名では「レーニン主義」を名乗ったけど、あれはレーニン主義じゃなかったな。どちらかと言えばマルクス主義正統派。

——だつて最初の総会で組織名を決める段から揉めてたもの。お茶の水大のキャップから労働者になつたばかりのOさんなんか「レーニン主義」だけは勘弁してつて言つてた。

望月 レーニン主義つていうのはさ、書記長なり書記局なりが全党全軍を指導するというイメージだけど、ロシアの左翼の運動には明らかに二つの大きな潮流があつたわけね。レーニンの流れとエスエルの流れと。

吉川 俺がレーニンを好きなのは、権力取ったときに迷つたのが素晴らしいことだと思つたの。望月 なるほど(笑)。

吉川 やつぱり、権力を取るまでの間つていうのは勝手にいろんなこともできるわけだけど、権力を取った途端に労働組合も反対派になるし、ソヴィエトももしかしたら反対派になるかもしれないし、全体を見なくちゃならない。権力を取つたがゆえに不幸になつたとレーニンは言つてるわけだね。スターリンには、その苦悩がなかつた。そのレヴェルでは私はレーニンは好きだったんですよ。ソヴィエトという組織を容認したのも、できたものを容認するという柔軟な姿勢に基

づいていたと。ソヴィエトというのはレーニンが作ったんじゃないやなくて……。

望月 民衆が作っちゃった。

吉川 それを容認する姿勢を持ったというのはレーニンの素晴らしいところであつたと思う。それ以降の過程がどうであつたのかというレヴエルは、また違うけど。

望月 いや昔は俺もそう思つただけど、今はちよつと違うなあ。レーニンはね、迷つただけど悪い方を選んでしまった。

吉川 そうかな。

望月 それはね、二月革命と一〇月革命の違いなんだよ。二月革命っていうのは、文字通り、エスエルとかボリシエヴィキの海外逃亡組じゃない、ペトログラド地区の連中たちが立ち上がつてやつたんだよ。特に一番最初、みんながビビっているなかでまず女性が立ち上がってね、最後は兵士が「デモ隊に発砲せよ」という命令に、逆に「お前らこそやられてしまえ」とひっくり返つて二月革命の勝利に至るんだ。美しいんだよ、これは。

吉川 美しい(笑)。

望月 一〇月革命は何だ。それは、「全権力をソヴィエトへ」というのは正しいよ。だけど正しいことをタテにとつてクーデターをやつただけだよ、レーニンは。ボリシヨイ劇場ではムソルグスキーの「ホヴァンシチーナ」をやつてんだから、蜂起の日に。「ホヴァンシチーナ」の解説は措いとくけど。その後だよ、止せばいいのに憲法制定議会の選挙をやるわけだ。で、負ける。選挙をやる以上は、負けたら「あんた方が多数派ですね、どうぞ」と言やあいいんだよ。そうじゃ

なくて、また解散させちゃう。クーデターだからそうなつちやつたんだよ。もうそのときに決まっちゃつたと思うよ、後のスターリン時代への道が。特に農民政策はエスエルの政策を一〇月革命でレーニンが採用するんだけど、レーニンはエスエル左派を切っちゃうんだから。エスエルって、ケレンスキーなんかね、物凄い悪者として歴史に残つたし、レーニンもやつつたんだけど。ケレンスキーもマリア・スピリドノワも、みんな一体となつてさ、一方では国会なんかの選挙やつてる。もう一方ではテロをやつてるわけだよ。で、ロシアではテロは大衆的に支持されていた。監獄列車に乗つてシベリア送りにされるとなると、駅に農民たちが集まつてさ、送られていく囚人たちを、まあ歓送というか、もう大挙して支持していたわけだから。それが反ツァーリの旗印だつたんだ。確かにスピリドノワとケレンスキーじゃ、戦争に対する態度が違う。でも、スピリドノワは戦争に対してはレーニンと一緒だよ。それをレーニンは切つて捨てた。みんな監獄に送っちゃうんだからさ。やつぱり決まっちゃつたんだよ、一〇月革命で。

吉川 最近、私書いた文章の一番最後に「んちくりんなこと書いたんですよ」。

——読みますと、「ある中心的メンバーが、共産主義政治はスターリン主義から抜け出られないのではないかと言つて戦列から離れたこともありますが、政治力学主義で意識を形成し党派を分裂させていくにとどまるかぎり、この言葉も当たつてしまふなあをつくづく考えさせられました」。

望月 全くだね。もう一つ、ロシア革命の話のその前があるんだよ。じゃあマルクスについてはどうなんだと。レーニンは『国家と革命』でパリ・コミューンについて、マルクスをはじめは反

対だったけれども、いざ始まったら、これを支持し、既成の国家機関を利用できないという教訓を引き出したと言ってる。『国家と革命』のその段については俺は賛成だ。あれは殆どアナキズムの国家論だよ（笑）。だけど、レーニンはマルクスをとんでもなく美化したと思う。はじめは反対したけれども一旦立ち上がったからこれを支持したというのは一体何なんだ。革共同もそうだったじゃないか。俺たちがバンとやる。これ、ブントの特質だからね。ブントは、理論はそれぞれ勝手に持ってますよ。だけど、民衆が立ち上がると思ったら、躊躇せず何でもやるんだ。もうこの一点がブントなんだから。六七年の二つの羽田闘争だってそうだ。あれがなかったら東大闘争、日大闘争だってなかったよ。六〇年安保もそうだった。大管法だってそうだ。ブントはやりましたよ。やったらさ、はじめは反対してたけども後から賛成した連中がこのこ出てきてさ、いろいろ言いだした。

吉川 そうだねえ。

望月 ブントは組織のことは考えないから。それできれいさっぱり分裂したりしてね。だけど、残った組織は何なんだと。今は中核派も革マル派も何の影響力もないですよ。じゃあ今は誰がやってるか。市民がやってるんじゃないの？ 沖縄だって、エイズだってね、原発だって。

吉川 いや、それは分かるけどさ。本当は俺もうちよつと意見を言うべきなんだけど、全般的に望月君のは「政党というものはいらんじゃないか」ということに繋がりがかねない議論だわね。望月 議会主義政党は必要だろう（笑）。で、『国家と革命』とパリ・コミューンの話をずつとさかのぼっていくとね、一八四八年の『共産党宣言』にたどりつくんだ。なぜかっていうとね、パ

リ・コミューンをやった連中、あれはブルードン派だ。

吉川 そうだね。

マルクスとブルードン

望月 つまり、フランスの職人労働者たちの社会主義の流れだよ。その社会主義の頭脳を代表してたのがブルードンだったわけだけれども、彼らはパリ・コミューンで殲滅されちゃった。一部はイタリアとかスペインに逃げ込んで、後のスペイン人民戦線なんかになるけど。要するにその連中がいなくなったらマルクス主義の時代が来たんだよ、ヨーロッパに。マルクス派は一握りのおしゃべりの徒だったんだ。それは四八年革命のとき、いやその前夜もそうなんだから。『共産党宣言』の最大の眼目はね、ブルードン派の活動家をパクリたかったということ。ブルードンとマルクスは出会い頭に分かれちゃうんだけど、ブルードンの方はナポレオン三世批判とか、フランスの大ブルジョアを批判するさまざまな文章を残してるんだけど、マルクス批判の文章は何にもない。でもマルクスは一所懸念ブルードンを批判する。その代表格が『貧困の貧困』だ。それで、俺はYさんに、ブルードンの『貧困の哲学』を邦訳してくださいって言ったら、「自分でやんなさい」なんて言われちゃって。それで英訳を買おうと思っただけど、ないんだよ。

吉川 英訳はあるよ、あの当時あったもの。

望月 今、品切れなんだよ。アメリカまで注文したんだけど。俺、フランス語は読めないから。

マルクスの『哲学の貧困』の方を読むとね、(六〇年代の党派機関紙類を指して)これと一緒に掲げ足取りばかり。それで『共産党宣言』では、ブルードンは「小ブル共産主義」という位置づけなんだ。実はそれこそ大事だと、俺は思うんだよ。なぜかっていうとブルードンはリヨンの暴動に感動したんだから。猛烈な勉強をやって一応認められる段階になったときにリヨンの暴動が起きて、そっちへ行つちやつた。あのリヨンの暴動は、プロレタリアートがやつたんじゃない。絹織物職人の親方たちがプロレタリアを引き連れてやつたんだよ。ブルードンは親方たちに同情しちやつた。プロレタリアが立ち上がるなんて幻想だよ。さっきさんざん労働運動の話をしたけど。

——大変な話になってきましたね(一同爆笑)。

望月 もちろん日本の労働者は力を持つてるし、賢いよ。でもプロレタリアートを指導する立場にいる中間管理職やその上の者たちがその気にならなかつたら、彼らは動かないよ。だけど、それも動かない。だから市民がやる運動になってるわけだよ。今でも一緒だよ。

吉川 だけどもね……。

望月 いや、マルクスはね、何もそんなムキになってブルードンと喧嘩する必要なんかなかったの。マルクス自身は大真面目で、自分が人間解放の思想を打ち立てたと思つたわけだけれども、ブルードンと喧嘩しちやつたばかりに台無しだよ。それで後マルクス主義の流れは二〇世紀にとんでもないことになつちやつたんだよ。

吉川 そんなこと言つたら、私はともかく編集部が困るんじゃないかな(笑)。

——一九世紀のドイツの左翼がマルクス、エンゲルスを理論的シャッポとして担ぐわけですよ。担ぐけれど、二人のジイさまどもは要するにお飾りだからと、言うこと聞かないわけですよ。すると、マルクスは割とナイーブだから自分の理論で行かないのはけしからんと批判を書くわけですよ。でも相手にされないわけですよ、殆ど。マルクス死後のエンゲルスはもうちよつと政治的に世知に長けてるところあるから、いろんな論法を駆使して影響力を持つとうとするわけだけど、マルクスにはそういうセンスは全然なかつたと思えますね。

望月 あれは確かにブントと似ていてお坊ちゃんだ。

ブント的な党派闘争

——うーむ。ところで猪突猛進と共にブントの体質っていうのかな、組織内にフラクションがやたらできがちという……。

望月 だからその起源はマルクスにあったのよ。

——マルクスから始まつた……じゃあ正統派ですな(笑)。

望月 つまり、セクト間闘争やるっていうのがさ、マルクス主義の正統派なんだよ。だけど、そもそもはキリスト教がそれをやつたんだから。もちろんマホメット教もそれやつたし、仏教徒もやつたんだから根は非常に深いんだよ。

——じゃあ、ブントはわりと人類史の知的正統でもあると(笑)。いや、つまりね、革共同系

は、宗教に譬えると明らかに一神教系の体質を持つてゐる。弾圧の仕方も凄まじい。ウチの会社にも元革マル派の人がいるけど、仕事で歩いてみると別の元メンバーと会つたりするわけですよ。会つたときに、お互いに凄く警戒してるんだつて。あいつ今は止めてるのか現役なのか。まずそれを確認しないと、ちらちら見てるけど話もできない。ブントには、そういうのないでしょ。昔殴り合つたことがあつても、会えば「よお久しぶり」なんてふうになる。

望月 いや、俺だつてその元革マル派の人たちと似たような心理状態に陥つてたよ、長い間。ただブントはさ、頭はマルクス・レーニン主義で一神教だつたんだけど、行動は多神教だつたんだ。

——だから多神教の寛容さや緩やかさみたいなのを体質的に持つてゐるところがある。これは第一次ブントのときからそうだつたはずなんですよね。フラクも、直接には東京社学同諸派の対立構造に起因する組織スタイルだけど、同時にある意味では緩やかさの所産です。

望月 さらに付け加えさせてもらうと、岩田弘はブントと違うの。ブントは頭はマルクス・レーニン主義で行動はアナキズムだつたけど、岩田さんは頭はアナキズムで行動はマルクス主義なの。六回大会の前に「統一再建六回大会の呼びかけ」プロレタリア永続革命の旗の下共産主義者同盟に結集せよ」という文章が出たけど、これは岩田さんの文章なんだよ。当時のマル戦派以外のブント諸党派の言つてゐることを否定しなくても岩田理論は十分展開できる。どれもこれも否定せず折衷もしてないんだよ。関西派の言つてゐることも他の人の言つてゐることも全部入れたつていい。その全体を体系的に、それこそコミンテルン以来の綱領らしき形に作ればこうなりますよという形でさ、情熱を込めて書いたわけだよ。極めて鮮明な文章で整然としていてアツピール力もある

でしょ。これは岩田さんの理論そのものなんだよ。

吉川 六回大会の政治文書作りの中心になつたのは岩田、服部、佐藤（飛鳥浩次郎／第二次ブント副議長）の三人だ。佐藤浩一さんが関西を代表しての意見を言つたから、これも盛り込んで。僕はブントの統一には大きな期待をかけていたけど、ただ組織の統一に至つた政治文書は、不一致を不一致とせず曖昧に包み込んだ嫌いがある。やがてフラク化が進むのではないかと危惧していたんだ。それぞれの集団が政治というものを実行するには未熟すぎたということもあつたと思う。七回大会での分裂も、綱領的次元ではなく力学主義的・戦術的レヴェルで行われてしまつた感があるね。

望月 じゃあ今の時点でこれがいつた良いのか悪いのか。ここに、「ジャコバン派の旗印を掲げよう」とある。フランス大革命とロシア革命と、全部引き継ぐわけだから、当然そうなる。当時は何の疑問もなかつたよ。だけど、ああいう結末になつて考えてみると、ジャコバン派には二つあつたんだ。ロベスピエールとダントンと。我々はどっちを取るんですか。

吉川 なるほど。

望月 そうなれば、ロシア革命ではレーニンを取りますかスピリドノフを取りますかという問題に答えを出さなければならぬ。ただジャコバン派だと言っただけじゃあ困る。やっぱりダントンとスピリドノフを取らなきゃならぬんだよ。この文書ではジャコバンの正系はロベスピエールであり、それを引き継ぐ正系がレーニン派でありというイメージで言つてゐるんだけど、それじゃあ駄目でしょうと。俺はそういうことにはもう付き合いたくない。それはともかく、岩田

さんは党員か党員じゃないかという議論があつたでしょ。バカバカしいつたらありやあしない。党員なんだよ、彼は。籍があつたかなくなつたかなくてレヴェルの問題じゃないんだよ。

吉川 結局問題は、それほど中心になつて文章書いてたのに政治局員に名前連ねるわけでもないということが、無責任体制そのものだったということ。

望月 彼はマルクス主義経済学をやつてきたから、『資本論』の体系は彼自身と切つても切り離せない関係にある。「俺はアナキストだ」なんて言うつもりは全くなかつただろうけれども、革命に対する本心と実際とは違うということだ。前衛派の党員としての岩田さんは、明日何するって話になればズレちゃつてさ。坂内君が「もう、いいワ」と、俺らがやるからと、そのまんま岩田さんを棚上げする体制に持つてつちやつた。

吉川 まあ確かに、岩田さんは、中核派などをふくめて、もう一つ大きくからげようとしたこともあつて、それで名を出さなかつたという事情があつたのかも知れない。

望月 一時、中核派だつて岩田さんを取り込もうと思つて一所懸命だつた。

吉川 岩田さんを服部が取り込むのか広田広や山村克が取り込むのか。六五年だつたか、参議院選挙に左翼統一候補を立てたことがあつたでしょう。

——中核派とマル戦派と長崎造船社研などで社会主義労働者戦線という共闘組織を作つて関西の中核派だつた浜野哲夫さんを候補者に押し立てた選挙ですね。

吉川 そう、確かあのころがそういう局面だつた。そう言えば、岩田さんと川上忠雄さんいいだもさんが連合して何かやろうということになつたこともあつたね。

望月 だからどこにも参加する必要はなかつたんだよ。逆に言つたら。

吉川 でも、その無責任さがああいう結末を生んだということも確かにある。

望月 もし彼が政治家ならばだ、完全な不参加を選んだ方が正しかつた。だけど彼はどちらかつていうと所感派の流れでしょ。大津事件の被告だし。だからやつぱり革命家は組織に参加してなくちゃいけないという、そういう思いもあつたわけだよ。それで中核派の方ではなく服部君の方を選んだんだよ。

——服部さんはマル戦系のトップだし、第二次ブントの書記長だつたわけだけど、党員にはあまり人気がなかつた。服部さんは一人で一から大衆運動を作れるというタイプじゃないでしょう。岩田さんと直結した党務の人であり、理論家ではあつたけど、どうも官僚的で、これがマル戦派の結束力を乱す一因でもありました。ただ他党派、これは関西ブントや東京の旧ML系、旧独立系のブントを含めて言うのですが、他党派から見てもマル戦派はどういう党派に見えたか。常に、服部さんの党派、あるいは静岡出身三人組の党派に見えてしまつたわけです。マル戦派の自己認識とはまるで違つている。これはマル戦の大いなる不幸だつたと思います。統一派だつて、服部さんとボス交をすればマル戦系を動かせると思つたわけですよ。でも服部さんが何かをボス交で決めてきたとしても、七回大会の後には「バカヤロー」つて若手が反乱しちゃうわけだから、マル戦派の中で話を通らない構造になつていた。

吉川 服部君のスタンスが下と乖離している状況は確かにあつたと思う。それがマル戦系ブントの弱みだつた。彼がまずかつたのは、やつぱり「理論はいろいろ言うけれども」……ということこ

ろだよ。俺、服部君と最後に別れるとき、「あんた、現実の感覚が分かっているんじゃないか」って言ったんだけどね。その後、前衛派と分裂した後の話だから俺はよく知らないけれど、現実を知らんと自分が駄目になると思ったのかどうなのか、彼が三菱に入って一介の労働者になって現場で一所懸命やっていると聞いて、あいつも少し変わったなあと（笑）、分かってるのかなあという風に、外ながら思ったときがあったよ。

力学主義をこえて

——そろそろ締め括ろうと思いますが、総括的なところで何か……。

吉川 私は力学主義的な発想に対して「それだけじゃ駄目なんだ」という気持ちを持ってたから、「地区」というものを重要視しようと思っていた。これは当時から非常に疑問に感じていたけど、「共産主義者同盟」という組織に「労対部」があるというのは何ぞやということがあった。学対部があるのは分りますよ。また労働組合対策部としての労対部というなら分かる。だが、そもそも労対部とは労働組合対策部なのかどうなのか。党の組織論——政党とソビエトの関係、政党と労働組合運動の関係、これらについて、きちんと詰めた方がいいという問題意識だ。だって共産主義者同盟というのが労働者の政党なのであれば、労働者対策を担うのは政治局そのものではないか。例えば公務員の場合、人勧が出る。「人勧完全実施」か「人勧打破」という議論を党主体として行っただけど、例えば組合の戦術としてストライキか否かは労組内党員が主張する

ことではあっても、党トータルがその戦術論議に溺れては駄目だということだよ。これは労働組合としての戦術レヴェルであって、党が直接戦術を云々することではない。ところが、マル戦派は思考体質が力学主義的だから、そういう問題意識を理解してくれる人が殆どいなかったという記憶がある。産別とか職場の闘争なんてのは、状況によつて日和ることもあればストライキを対置するときもあるし、いろいろだけど、地区の人間をトータルに繋げていくためのものがいったい何であるのかという問題がある。そのレヴェルに行かないと駄目なんじゃないかなあと考えていた。どちらかつていうと望月君の「人勧打破」という方針に対して、俺は「それは党の方針じゃないんじゃないか」と。支持するかしらないかというの、わがブントの党員が日教組の中で全通の中で議論する内容ではあるけれども、党自身が人勧打破であるとかそうではないのかなどというのは出すべきでない。そういうような反省もあった。

望月 今ならその通りって言えるよ（一同爆笑）。当時は……。

吉川 それでやったんだけど。ブント七回大会後のマル戦系の分裂で怒濤派（労働者共産主義委員会Ⅱ労共委）を作ってから僕はこの問題意識をもう一度掘り下げていくことになる。共産主義というのは「思想」なのか「主義」なのか、それとも「政策の体系」のようなものなのか。それを、岩田さんの「弱い環」論からどうやって訣別するのかという視点に繋げていったわけです。「綱領」というものを重視する視点で労共委を作ろうとした意味はそこにあった。共産主義革命は労働者が主体となったものに、あえて「労働者」を冠したのは、力学主義から訣別し真に労働者を主体として据え、かつ支持される組織にしようという気持ちを反映してのことで、念に

は念を入れた（笑）。

望月 だけどさあ、共産主義者の上に「革命的」ってつけてる人たちがいたわけで、ブントはそういうの嫌だったんだから。

吉川 それはそうだ。ただ、僕らがそれでも共産主義に「労働者」ってつけようと思ったのはね、やっぱり労働者が主体なんだからそこを組織していこうと。それで今度は、主義と政策と、そのへんの接点が非常に難しいところなんだけど、そのあたりをやっているかと思つた結果だったんだ。それでもなおかつスターリン主義になるんだっていう議論も出てきたけど。それから非常にいろいろあつて今日に至っているわけだが、左翼も大きなところもある程度つかんでいかないと、一つの潮流にならない。少数派が多数を支配するときには暴力を使わなくちゃならなくなるから。まあ私も今一人になっているから何とも言えないけどね。

望月 やつぱり「地方の時代」ですよ。HIVは地方の時代とはちよつと違うけれども。

吉川 いや、そうした運動が起きるといふのは、ある意味では必然だという認識をもたなくちゃならんが、その場合に共産主義という問題が今度はそこにどういう形で関わるのか……。

望月 関わないのか。

吉川 そう、妥当であるのかということが、また一つの大きな問題じゃないかね。

望月 俺は関わないと思うけどね（笑）。（聞き手 府川充男）

【もちつき・あきり】一九三九年生まれ。当時第二次ブント政治局員。静岡大学から東京大学を

へて東京学芸大学出身。

【よしかわ・すすむ】当時第二次ブント政治局員。静岡大学出身。

【ふかわ・みつお】一九五一年生まれ。当時第二次ブント高校生細胞。早稲田大学出身。ブックデザイナー。